

説明的文章(1)

◆指導ページ P.2～7◆

【指導のポイント】

説明的文章を題材にして、文章中における指示語と接続語について学習する。指示語が何を示しているかを精確に読み取ること、接続語の役割について正しく理解することを目指す。また、段落冒頭の接続語に注目することで、どのような文章構成であるかを判断し、文章全体の論旨を捉えることを目標とする。

確認問題の板書例

■筆者の主張

真つ向から向かい合うことでそれに対峙する能力が身につく点は「読書」も「クロスカントリー」も同じである。

■展開

〈読書に必要なもの〉

- ・積極的な知性・難解な本では相応の高い能動性

① 退屈な場面

② 深く考えなければついていけない

← 深く起伏のある著者の精神性に「寄り添う」ための忍耐力

① 精神の起伏に対する寛容性

② 読解力

← 自身の起伏を生み出す力

〈クロスカントリー〉

- ・アルペンスキー界の不世出の王者のインゲマル

練習法：起伏の激しい斜面をバックルを外して滑る

甘えとなり野生の感覚を鈍らせるバックルを外す

雪面を足の裏の精妙な感覚でとらえることができる

■まとめ

起伏に対して安全具なしで真つ向から向かい合うことでそれに対峙する能力が身につく点は「読書」も「クロスカントリー」も同じである。

ドストエフスキーを読む

① 心の野生が鍛えられる

② 判断力も身につく

重要語句

○能動⇨他からのほたらきかけを待たずにみずから活動すること。

○精妙⇨極めて細かく巧みであること。

演習問題Aの板書例

■筆者の主張

固有名詞は社会的のコンテキストの中にそれ自身の本来の意をもっている。

■展開

〈子どもが社会化する過程〉

学校に入学

（社会組織に入る）

← 固有名詞を一言に教え込まれる

（社会的コンテキストをもつ言語）

← 社会を営む人間になる

〈言語学〉

ことばの科学ではあるが、本質的にその側面は欠如している。

普通名詞と一般名詞の違いの側面からのみ考えていて、社会的コンテキストにおいて考えることはしていない。

← 正しい認識

← そもそもその固有性は社会におけるもの、歴史的な固有性である。

（例）↓ 人名 キムさん、アインシュタイン

重要語句

○帰属⇨特定の組織体などに所属し従うこと。

演習問題Bの板書例

■筆者の主張

人為的に流行をつくり出す一般論は存在しない。人類史が明確に説明しつくせないのと同様に流行り廃りはわからないものだ。

■展開

〈流行とは？〉

日常にありふれている

← 流行

← 個人的な奇矯

← これら三つの範疇には本質的違いはない

← 一般化・固定化・永続化

〈流行のつくり方〉

「潜在的欲望」は存在しない

← 新しい規範づくり

（↓ 著名人による宣伝、多くの宣伝を打つ）

* 技術力で価格破壊を起こせば需要を感化できることもある

← 人為的に流行をつくり出す一般論はない

（そんなものがあれば人類が歩んだ歴史の謎がわかってしまう）

重要語句

○平衡⇨物のつりあいがとれていること。

説明的文章(2)

◆指導ページ P.8～13◆

【指導のポイント】

文末表現に注目して事実か意見かを判別する。主な意見を述べている中心部分と、意見をわかりやすくするための補足や具体例にあたる付加部分に分ける。要旨を捉える手順は、話題は何かをおさえ、キーワードや中心部から各段落の要点をつかみ、各段落の要点をつなぎ合わせて要旨をまとめる。中心的段落の要点や問題提示部とその直接的答えをつなぎ合わせることで要旨をつかむことを目標とする。

確認問題の板書例

■筆者の主張
人は持続的な生物多様性の創出などという人間本位な思想を捨て、脈々と続いている地球生命系の中に共存する道を見つめるべきである。

■展開
〈地球生命系〉

① 生物種の移住や種の栄枯盛衰
② 気候変動のような環境の変遷

← 四十億年の長い進化の過程のそのときどきで、安定した生態系を形成

・生態系の維持の構造
① 競争関係(捕食者・被食者の関係)
② 数量的平衡(食物連鎖の平衡)

〈地球生命系に對峙するヒトの姿勢〉
自分の行動に目がくらんで、我が物顔で振る舞う習慣がある

← その振る舞いが地球環境の劣化をもたらし自らの首を絞めている (そもそも人と自然の共生は宿命である)
〈今後求められる姿勢〉
多様性を持続する

← ×持続的な生物多様性の人為的創造

← 地球生命系の維持機構の一端を担うような新たな進化(地球生命系の中に自らが入り、共存していく道)

■筆者の主張(まとめ)
人の誕生は地球生命系の歴史のほんの一瞬でしかない。地球生命系は多様な共存者たちの中で平衡をとってきた人は持続的な生物多様性の創出などという人間本位な思想を捨て、脈々と続いている地球生命系の中に共存する道を見つめるべきである。

重要語句

○栄枯盛衰⇨繁栄がいつまでも続くことはなく、いずれは衰える。
○矩⇨道理から外れる。

演習問題Aの板書例

■テーマ
撞着語法はシャレた表現であり、それが古くからあることは興味深い。

■展開
〈寺田寅彦「科学者とあたま」(一見矛盾した論)〉
科学者は頭がよすぎても大成せず、適当にぼんやりしているくらいがよい

秀才 → 困難にすぐに気が付き、それ以上は手をつけない
愚直 → あらかじめ余計なことを考えずに腰を落ち着けて取り組む

〈撞着語法〉(↓矛盾をはらむ言い回し)
一見同一次元にある概念を並べた表現だが、それらを別々の次元にある概念としてその表現を読むと機知に富んだ意をもつ。
(↓それらの構成概念を拡張的に読む知識が必要)

例
公然の秘密、まけるががち、ありがためいわく

← このようなシャレた表現法が古くからあることは興味深い(↓大人のことは)

重要語句

○矛盾⇨前に言ったこととあとに言ったことが一致しないこと。一般に、理屈として二つの事柄のつじつまが合わないこと。

演習問題Bの板書例

■テーマ
日本社会においては表面的には「謙虚さ」が求められるので、自分を過大評価する人は、すこし謙虚な気持ちでいた方が適度な自己評価となる。

■展開
〈脳は自分を「できる奴」と思い込んでいる〉
・アメリカのデータ → 自己評価がかなり高い
・日本のデータ → 本心は欧米と似たレベル

← ヒトは自己を過大評価する傾向がある

← 原因 情報の偏り (叱る人が少なくなり、ほめられてばかり)

〈生理学的観点〉
他人から好評価を得る

← 「側坐核」の活性化
← 「快感」が得られる
← 嫌な情報は排除し、得たいものだけ得る
← 脳内で自己願望達成

← 自己の過大評価
← 自己のレベルを正しく判断できない(一見不利)

← 向こう見ずなのが有利に働き、集団の中で優位になる
← 自信があると輝き、魅力的

← 「謙遜さ」を重要視する日本では、過大評価することを自覚し、謙遜するぐらいで適度な自己評価
実るほど頭を垂れる稲穂かな

重要語句

○謙虚⇨控え目で、つましいこと。
○謙遜⇨自分の能力・価値などを低く評価すること。控えめに振る舞うこと。

文学的文章(1)——小説①

◆指導ページ P.14～19◆

【指導のポイント】

小説は、人物・場面・事件の基本要素に注目し、人物がどのような場面で事件に出会い、どのように考え行動するかを読み込む。また、構成要素から内容の理解を深める。筋の展開や描写から作品の主題を捉え、人物の背景を通してその時代・環境をつかむ。また、文体や描写の特徴から作品の背後にある作者の個性や思想を捉える。情景描写や表現技法にも注目し、情景の変化から人物の心情の変化を読み取る。

確認問題の板書例

重要語句

○「法度」してはいけないこと。禁止のおきて

- 事件
 - 弟(銀平)が子犬を拾う。
- 人物
 - 旅回り一家の兄弟
 - 〈兄(勘平)〉
 - 劇場裏手の防空壕跡で芝居の秘密特訓
 - 〈弟(銀平)〉
 - 小犬を拾う
 - 食うのことに欠く家計(↑旅回りの芝居一座)
 - 友人の一家の家も無理
- ← 劇場裏手の同じ場所で飼おうとする
- 場面
 - 〈小犬の今後について話す〉
 - 兄 必死に特訓している
 - 弟 芝居の練習の邪魔
 - のん気に子犬を飼おうとしている
 - 兄 子犬を飼うことはできない(父に通告する)
 - ← 河原にその犬を置いたとき
 - 銀平にじゃれようとして、無垢な目で見上げた
 - 銀平は心を打たれた

演習問題Aの板書例

- 場面
 - 僕(山本太郎)は父(正二郎)に、普段から抱く平凡な生活への愚痴をこぼしている。
- 情景
 - 〈太郎〉
 - ・乏しい小遣いを預金する際の名前の記入で、自らの平均的名前を意識する
 - ・学区の小学校、中学校に通う
 - ↓生活空間に広がりがない
 - もつと生活空間に広がりを持たせ、平凡とさよならしたい
 - 〈父〉
 - 人間が平凡な生活から出発すること
 - 人間としての謙虚さを育み、それを持ち続けることを願う
 - 〈父の願いに対する太郎の思い〉
 - その願いの真つ当さは理解するが、実際にはそのような全て平均的な人は存在しない
 - (考える余地がなく、結局はそんな願いは達成しない)

演習問題Bの板書例

重要語句

○緩慢⇨動きがゆったりしてのろいこと。

○稚拙⇨幼稚で未熟なこと。

- 場面
 - 画塾で主人公(ぼく)が教えている太郎に、徐々に自我が芽生えようとしている。
- 情景
 - 〈ぼく〉
 - 子供の内的な問題に試行錯誤する
 - ↓生じる疲労感には耐えられる
 - アトリエの外で受ける自我の抑圧に対峙すること
 - ↓規模が大きく途方もなく耐えがたい
 - 〈太郎〉
 - 太郎には自我を形成していく環境が存在していない
 - 画塾の友人と公園や川原で遊ぶようになる
 - ・太郎の画
 - 運動場の子供を自分自身の視点からの絵を描く
 - ↓自己が存在しだしている
 - 公園で仲間と競争
 - ・太郎の画
 - 走っている自分を描く
 - ↓明確に自己が存在している
 - ← 自我の芽生え

文学的文章(2)——小説②

◆指導ページ P.20～25◆

【指導のポイント】

人物の心情を捉えることは、作品の主題に迫るための最も大切な手段である。心情は、人物の言動や表情・態度や情景などを通して様々な視点から捉えることができる。主題を捉える上では、題名が手がかりとなることもある。主な主題は中心人物の言動や心情から読み取る。多くの場合、中心人物は作者の分身である。作者の熱意が込められた印象的な表現描写や感動的な場面・情景に主題が色濃く反映されている。

確認問題の板書例

■場面
遊び友達を四五人連れた少女ひろ子が、お手伝いのまきと話している。ひろ子が蕨の芽をむしつたとまきが疑っている。

■情景
まき 「嘘だろ！ 両手を出してお見せ」
(返答返しが続き、自信をなくししどろもどろ)
ひろ子 「はい」
(素直な良い子を装って返事)
まき 「ふーむ」
(当惑)
さらに、まきはひろ子に問い詰める
ひろ子は大人びた言いまわしで不人情なことはいと返答
(生意気に可愛げなく大人の論)
まき 「…この子たち口減らずといたら——」
「早く向こうへ行つて。おまえなど」
(憤慨)
ひろ子たちが逃げようとしていたので、まきは態度を切り替えて懐柔にでる
子供たちの生返事

〈私〉
一連のやり取りを聞いていて、むしろれた蕨をみて怒りが生じたが、それでも子供の悪戯に過ぎず微笑ましく思っている。

重要語句
○憤慨＝ひどく腹を立てること。

演習問題Aの板書例

■場面
私(照代)が近所のサヤさんとのやり取りで、自己嫌悪を覚えている。

■情景
サヤさん 「私もね、…」
↓人は向き合う姿勢で関係性が変わる
私 私は無言で足を速めた。
↓素直には聞けない
サヤさん 「人の気持ちって、…」
↓さらに念押し
私 「私が人を嫌いまくってるから、…」
↓冷やかに否定
サヤさん 「…そうじゃないわ。…」
↓当惑
私 「…滑らかに説教されても、…」
↓悪びれながらも毒を吐く
(私の本音)
・正論を説き私を論そうとしているサヤさんのことを理解している
・小さい頃から私が好きになる人はそれに伝えてくれない
葛藤 ↓ 自己嫌悪

重要語句
○歯牙にもかけない＝相手にしない。

演習問題Bの板書例

■場面
主人公(自分)が雨あがりの日、学校の帰途で、いつもの道からそれて崖の近道を選んだ。

■情景
踊り場のようなところまで、滑り落ちる
誰かがその滑稽な様子を見ていなかったか気になる
↓他者に存在を認知してもらいたい
石垣の手前までさらに滑り落ちる
誰かが見ていなかったか気になる
↓他者に存在を認知してもらいたい
人の目を引きたい気持ちが衝動でいつもにないことを試みるが、その衝動を自分で受け入れることはすぐにはできない。

〈自分の心〉
・傾斜に出かかるまでの自分
↓自我をもち思考する自分
・不意に自分を引きずり込んだ危険
↓自分の判断意識
・今の自分
↓世界として認識する客観的自分
確たる自己を肯定できない(同一性の欠如)
↓社会に対する自己充足感の欠如(孤独)

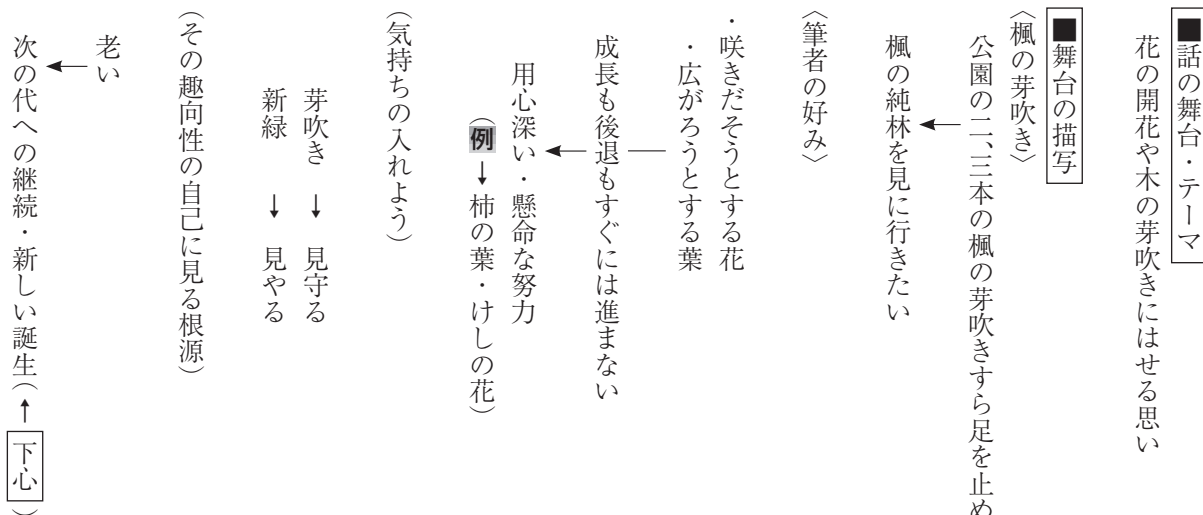
文学的文章(3)——随筆

◆指導ページ P.26～31◆

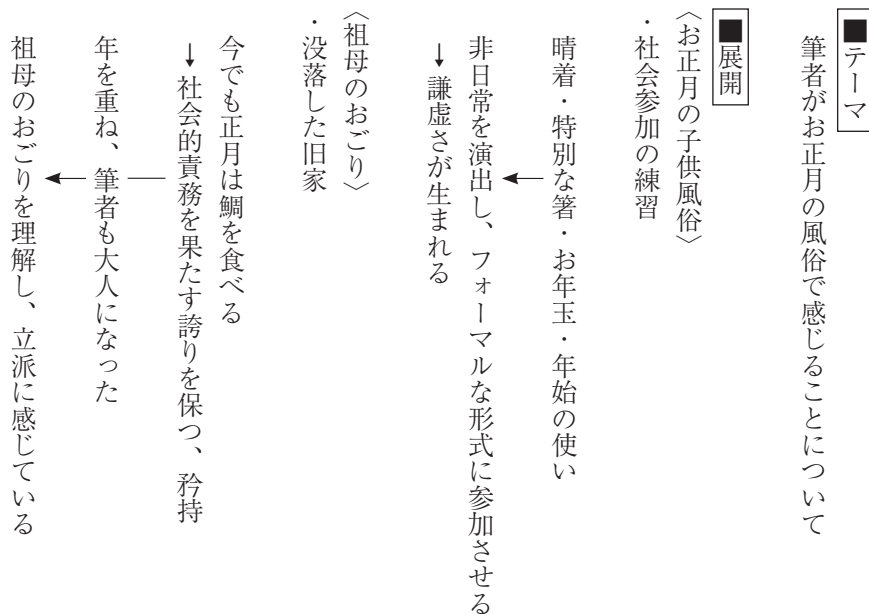
【指導のポイント】

題名は主題と関わりが深い。まず筆者が話題をとりあげた理由、話題の中心はどこか考える。主題は、多くの場合、文章の初めか終わりにある。主題を捉えるには、比喩や倒置法などの表現技法を用いて強調された部分や筆者独特の表現を探る。また、筆者の感想・意見を示す文末表現から主題の大事な要点を読み取る。

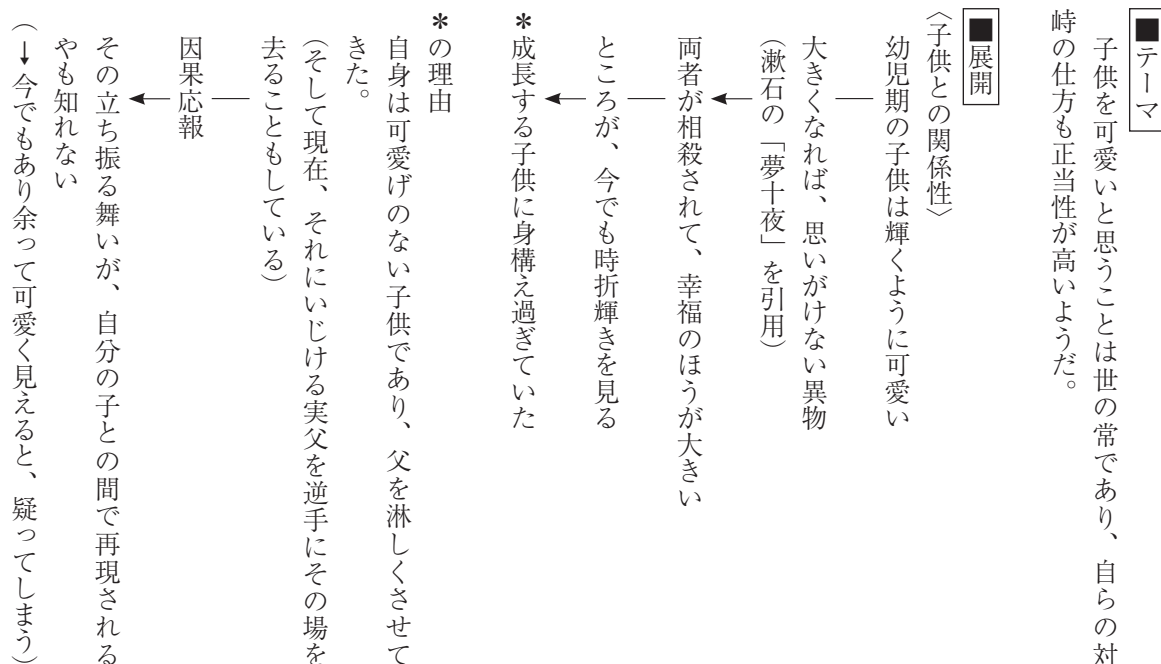
確認問題の板書例



演習問題Aの板書例



演習問題Bの板書例



重要語句

○因果応報＝人はよい行いをすればよい報いがあり、悪い行いをすれば悪い報いがあるということ

【指導のポイント】

古典とはどのようなものかを簡潔に説明する。古文の内容を読み取るには、よく用いられる古語とその意味を理解する必要がある。特に、現代語と同形で意味が異なる語や現代語にない語を提示する。省かれた主語や話者は、敬語表現の違いや話の筋などから判別する。また、昔の習慣・時代背景について説明し、現代とは異なる暦や主な年中行事・時刻や方角の表示法などにふれる。

確認問題の板書例

<p>あだ名 「堀池の僧正」</p>	<p>あだ名 「きりくいの僧正」 ↓ 僧正激怒</p>	<p>あだ名 「榎木の僧正」 ↓ 僧正激怒</p>	<p>あだ名 「榎の木を切ったら根が残った」</p>	<p>あだ名 「榎の木を切ったところの近くに榎の木があった」</p>	<p>内容 怒りっぽい良覚僧正の住んでいるところの近くに榎の木があった</p>	<p>現代語訳 腹あしき人 ↓ 怒りっぽい人 然るべからず ↓ 不適切だ</p>	<p>現代仮名遣い せうと ↓ しょうと きはめて ↓ きわめて</p>	<p>文法事項 現代仮名遣い</p>
--------------------	---------------------------------	-------------------------------	----------------------------	------------------------------------	---	--	--	------------------------

演習問題Aの板書例

<p>内容 しゃんとが酒に酔って、大海の水を飲みつくせなければ全財産を差し出すこと(果たせない不可能なこと)を約束</p>	<p>いそほに約束を無効にする方法を懇願 (条件として、いそほを奴隷の身から解放する)</p>	<p>海の水だけを飲むために、流れ込んでくる河の水は相手に止めさせるようにいそほは助言 (海の水は飲むが河の水は飲まないという詭弁)</p>	<p>全ての河をせき止めるのは不可能なので、相手は言い返せない</p>	<p>しゃんとが先生として相手に崇拜される</p>	<p>内容 あまつさへ ↓ さらに 何とか答え候べきや ↓ 何と答えられることができませうか(いやできない)</p>	<p>現代語訳 とくとく ↓ 早く げにも ↓ それはい まほしう ↓ まほしゅう まづ ↓ まず</p>	<p>現代仮名遣い あたへん ↓ あたえん のたまひて ↓ のたまいて おどろきさはぎ ↓ おどろきさわぎ</p>	<p>文法事項 現代仮名遣い</p>
---	---	--	-------------------------------------	---------------------------	--	---	---	------------------------

演習問題Bの板書例

<p>内容 うれしいもの まだ見ない物語 人が破り捨てた手紙 見た悪夢が問題ないと夢解きされたとき 身分の高い人が、ためになる話を目を見て話聞かせてもらえるとき 大切な人の病状がよくなったと便りをもらうとき 自分の好きな人が、人にほめられ、身分の高い人にもよく思われるとき</p>	<p>うれしい つくった和歌が世に知られ、ほめられるのはきつと</p>	<p>現代語訳 さらなり ↓ 言うまでもない やんごとなき ↓ よい くちをしからぬ ↓ まんざらでもない もしい ↓ あるいは</p>	<p>文法事項 現代語訳</p>
--	---	--	----------------------

【指導のポイント】

詩は、用語上では口語詩と文語詩、形式上では自由詩・定型詩・散文詩に分かれる。文語詩の用語、定型詩の形式の主な特色にふれ、具体例をあげて説明する。詩歌の表現技法については、比喩では直喩と隠喩の区別、擬人法はどんな技法か例をあげて具体的に解説する。強調表現の倒置法と反復は主題をつかむ手段として例とともに提示する。短歌は、五・七・五・七・七の三十一音からなる形式を説明する。「句切れ」については、作品例を引用して具体的に説明しながら、何句目で切れるかを分類する。

確認問題の板書例

<p>1</p> <p>〈形式・表現技法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現代の話し言葉、特定のリズムや形式はない ↓ 口語自由詩 ・10行目 「それがなかに追いつこうとするなら」 ↓ 擬人法 新芽がなかに追いつこうと成長する <p>〈内容〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・白い火 ・すさまじい音 ・天地をくつがえすような大音響 ↓ 生命が生まれ出る瞬間の重大さ <p>第一連</p> <p>木々が芽吹くとき 〽 すさまじい音を発する。</p> <p>↓ 木々の芽吹きの一つ一つは、生命の生まれ出る瞬間でとてつもなく重大なものである</p> <p>ただそれはかずかぎりもなく同時的だから</p> <p>だれにもきこえないだけである</p> <p>↓ 木々は一斉に芽吹くので、個々の生命が生まれ出る瞬間についてはだれも気にもとめない</p> <p>第二連</p> <p>数兆数億の 〽 われらの耳に達するだろう。</p> <p>↓ もし一つの新芽が出遅れて芽吹いたら、そのときは生命の生まれ出る瞬間の重大さについて大いに気づくことができるだろう</p>	<p>2</p> <p>A 〈内容〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自らのいのちが尽きることを直視はできない <p>B 〈表現技法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・切れ字 ↓ぞ <p>C 〈表現技法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人旅の寂しさ <p>「そ」↓ふるさとの訛</p>
--	---

演習問題Aの板書例

<p>〈形式・表現技法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 二行五群 ↓ 見やすい <p>倒置法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・重い鳥のように：ひと声さけんで通る ・何かしら安堵のように：わたしの腕がコトリと垂れる ・またも孤独を迎える興奮に：わたしの瞳の色が変わる <p>〈内容〉</p> <p>人生を北国からくる列車と列車の運行を決めるシグナルで喩えている</p> <p>シグナル ↓自分</p> <p>終列車 ↓運命</p> <p>瞳の色 〽 素朴な言葉(二タ言三言しかしらない)</p> <p>↓ 赤、青、黄</p> <p>赤：待て</p> <p>青：進め</p> <p>黄：注意</p> <p>↓ 毎日の行動を三つの中で過ごしている</p> <p>赤：止まる</p> <p>青：進む</p> <p>黄：しばらくまつ</p>
--

演習問題Bの板書例

<p>1</p> <p>A 〈内容〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ↓ 子供とともに過ごす時間さえあれば、どんなせいたくもいらぬ <p>B 〈内容〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ↓ 四句切れ <p>〈内容〉</p> <p>死というものは身近であるが、全く知ることのできないものなので、子供に金魚の死んだ行末について聞かれた際に、死について思いを巡らせている</p>	<p>2</p> <p>〈表現〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・栗のイガみたいに 〽 歩いていた ↓ わたしが屈託している様子 <p>擬人法</p> <p>(詩のどこどこに擬人法が散りばめられている)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・だれかがわたしを ゆさぶるのです … など <p>対照的表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地球がごうごうと走っている ・空に ぴったと はりついている <p>〈内容〉</p> <p>わたしが屈託したある日、地平線に沈みかけている夕日が織りなす景色を目にしたことにより、お日さまはいつもそばにいてくれるから自分は孤独ではないと気がつき、元気を取り戻した</p>
---	--

文法・表現

◆指導ページ P.44～49◆

【指導のポイント】

文章>段落>文>文節>単語という分け方を具体例で学ぶ。文の組み立てについては、文節の分類と文節相互の関係を関連づけ、主語・述語の関係、修飾・被修飾の関係などの実例を通して学ぶ。自立語と付属語の相違点については、補助の関係に注意して説明する。文の表現では、構文があいまいで誤解されやすい文を、語順を入れ替えたり、読点を加えたりなどの修正を加えて、かかり受けの関係を明確にする方法を具体例に基づいて学ぶ。

確認問題の板書例

<p>(2) 当日は／わたしたちも／お祭りを／見物しに／行きます。</p>	<p>(1) ぼくは／明るい／気分／で／自転車／を／すいすい／走ら／せ／た。</p>	<p>① 「ね」をいれて文節で区切る ② 文節を自立語と付属語に区切る</p>	<p>4 (6) 賢く 美しい (5) はい、そうです (4) かかって いる (3) 夕方だから、帰るよ (2) 遊覧船が 進む (1) 燃え立つように 赤く 咲く</p>	<p>3 (3) 大海原、そこには人の冒険心を かきたてる 何が ある。</p>	<p>(2) 飲んでから 出かける。 姉は 毎朝、コーヒー、または 紅茶を</p>	<p>(1) 古い 柱時計が 十二時を 打った。 風が／野原を／さわやかに／吹きぬける</p>	<p>1 「ね」をいれて区切っていく 私は／新しい／かさを／さした。</p>
---------------------------------------	--	---	---	--	---	---	--

演習問題Aの板書例

<p>(2) ボールが転がる ↓動き出すと止まらないイメージ</p>	<p>(1) 岩 ↓大きく、どんとしているイメージ</p>	<p>6 (4) ムクゲや サルスベリ ↓並列の関係</p>	<p>(3) 眠って いて ↓修飾・被修飾の関係</p>	<p>(2) 彼も 来る ↓主語・述語の関係</p>	<p>(1) 明るく 笑った ↓補助の関係</p>	<p>5 (4) キャンドルの神秘的な光が厳肅な雰囲気をつさげ盛り上げる。 ↑</p>	<p>(3) すばらしい演奏に、ぼくたちは心から感動した。 ↑</p>	<p>(2) 銅は人類が生活の道具を作るために最初に実用化した金属である。 ↑</p>	<p>(1) 夕暮れに聞く鐘は人をなつかしい気分させる。 ↑</p>	<p>4 (4) その小さな温泉旅館は、毎年多くの泊まり客でにぎわう。 ↑</p>	<p>(3) 自分の考えを相手に的確に伝えるための技術は、意外に難しい。 ↑</p>	<p>(2) 取材班は、当時のことをよく知る人物との接触を試みた。 ↑</p>	<p>(1) あの白い服の女性はぼくのおばです。 ↑</p>
--	-----------------------------------	------------------------------------	----------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	---	---	---	--	---	--	---	------------------------------------

演習問題Bの板書例

<p>(4) 明るい性格の彼は歌が大好きだ。 ↓明るい性格なのは彼なのか彼の妹なのかはつきりしない 〈明るい性格は妹〉 ・「彼の明るい性格の妹」に変える</p>	<p>(3) 響く霧笛はさびしくたたく男の心に染み入った。 ↓「さびしく」がかかるのは霧笛なのか男なのかはつきりしない 〈さびしいのは霧笛〉 ・「さびしく響く霧笛」や「霧笛はさびしく響き」などに変える</p>	<p>(2) 母が洗った食器をふき、姉はていねいに棚にしまった。 ↓食器をふいたのは、母なのか姉なのかはつきりしない 〈姉が食器をふいた〉 ・「姉がふき、ていねいに棚にしまった」に変える</p>	<p>(1) 彼女が目をこすりながら朝食を作っている母に声をかけた。 ↑ 彼女が目をこすりながら、朝食を作っている母に声をかけた。 ↑ 目をこすりながら彼女は、朝食を作っている母に声をかけた。 ↑ ・「目をこすりながら」を「彼女」の前に移動することで、目をこすりながら誰かが明確になる。 ↑ 彼女が目をこすりながら朝食を作っている母に声をかけた。 ↑ 目をこすりながら朝食を作っている母に、彼女は声をかけた。 ↑ ・「彼女は」を「母に」の後に移動することで、誰が何をしているかがはつきりする。</p>
--	--	---	--